Rikkyo Psychological Research
2010, Vol. 52, 21-31

展　望

社会的排斥についての研究ノート
――将来の社会的排斥の診断的予言――

立教大学名誉教授　押見輝男

A note on social exclusion research: The diagnostic forecast of future social exclusion

Teruo Oshimi（Professor Emeritus, Rikkyo University）

The purpose of this study is to review the 41 experiments (in 11 papers) in which sense of social exclusion was manipulated by telling participants that they would end up alone later in life. It was shown that only 4 experiments ran a check on the validity of this manipulation. Among the total participants (*N* =1997), 30 expressed suspicion that the feedback was bogus. Ten experiments tested the convergent validity of this experimental paradigm with experiments in which social exclusion was manipulated by being rejected face-to-face. The analyses of mediation consistently failed to show any effect by emotional distress. The characteristics and the utility of this experimental paradigm are discussed.

Key words : social exclusion, anticipated aloneness, validation of experimental manipulation

社会的排斥（social exclusion）は他者や集団から仲間外れや除け者にされたり，継続を望んでいる関係が一方的に打ち切られたりする現象である。Baumeister & Leary（1995）は他者との関係形成や他者からの受容を求める所属要求（need to belong）について論考し，その基礎的，進化論的重要性を主張しているが，この所属要求の阻止と関連した現象が社会的排斥である。類語としては，社会的拒絶・拒否（social rejection），社会的無視（social ignorance），社会的排除・追放（ostracism）などがある。社会心理学事典による定義では，社会的排斥は“個人や集団を社会状況から締め出すこと”（Williams, Wesselmann, & Chen, 2007），社会的拒絶は“社会的受容，集団包容，所属感の低下の知覚”（Knowles & Gardner, 2007），追放・排除は“人を無視したり，排除したりする行為”（Williams & Carter-Sowell, 2007）である。社会的排斥は状況全体をさす用語，拒絶は排斥を受ける側の知覚状態，追放は排斥を実行する側の行為をそれぞれさすといえる。しかし，この定義の区分を遵守した用語法による研究論文はみあたらない。一般的には各類語が互換的に使用されているのが実情である。Molden, Lucas, Gardner, Dean, & Knowles（2009）は排斥の伝達の明示性から，直接的で明白なタイプの“拒絶”と，間接的で暗示的なタイプの“無視”に分けて実証的な研究を行っているが，この分類図式で既存のすべての研究を分類することはできない。

社会的排斥に関する最も古い実験的研究はSchachter（1951）の同調-逸脱の研究であろう。これは集団討議において多数派の意見に一貫して同調しない逸脱者が他のメンバーからコミュニケーションを向けられなくなり，集団から排除されることを明らかにしたものである。1960年代の愛着（attachment）研究や1980年代の孤独感（loneliness）研究も社会的排斥研究の流れの中に位置づけることはできるが，社会的排斥についての直接的で集中的な取組みは，近年Baumeister, R. F.の

研究グループが所属要求との関連から行っている実験的研究群である。彼らのユニークな研究方法は，実験参加者に性格検査結果に基づく診断的予言として，人生の晩年は一人ぼっちになる見込みであるとの偽のフィードバックを与え，その心理学的効果を調べるという実験パラダイムに依っていることである。この実験パラダイムは“将来の社会的排斥の診断的予言（diagnostic forecast of future social exclusion：以下，‘排斥予見’と略）”と呼ぶことができる。本稿の目的は，このパラダイムに依拠して行われた11の研究論文，41の実験を吟味し（Table 1），この研究方法の実態を明らかにし，将来の社会的排斥の予期がもたらす心理的効果の媒介要因についての実験結果をまとめることで，今後の研究指針とすることである。

排斥予見の実験操作方法と特徴

実験手続

排斥予見の実験パラダイムを最初に用いたのは，Twenge, Baumeister, Tice, & Stucke（2001）である。この実験パラダイムで用いられる教示については， Baumeister, DeWall, Ciarocco, & Twenge（2005）が補足説明をしている。排斥予見パラダイムの実験では，実験参加者は外向性の性格検査であるEysenck Personality Questionnaire（Eysenck & Eysenck, 1975：以下，EPQ と略）に回答し，その結果についてのフィードバックを受ける。まずフィードバックの信憑性を高めるため，参加者の外向性得点とその高（中）低群の位置づけについては正しく伝えられ，その後に判定されたパーソナリティについての虚偽の解説文が実験者から読み上げられる。虚偽の解説文は 3 種類あり，社会的排斥条件となる future alone，統制条件であるfuture belongingとmisfortune controlである。

まず実験者は次のように口頭で話し始める。

future aloneでは“外向性得点が高い，あるいはかなり高いということは，人との出会いにはよいことです。とくに大学生のときは。しかし，外向性得点の高い人は晩年の人生では安定した人間関係を保つことが難しいとの研究があります。パーソナリティの解説を読みましょう”，ないしは“内向性であることは実は人間関係においてよいことではありません。大学を出るや人との出会いが大変となり，あなたの外向性得点が高ければそれがより簡単です。努力しないと人との出会いがいっそう難しくなります。パーソナリティの解説を読みましょう”と言う。

future belongingでは“外向性得点が高い，あるいはかなり高いということは，あなたが人を好み，人の方もあなたを好くということを意味しています。外向性であることは人間関係にとってほんとうによいことです。パーソナリティの解説を読みましょう”，ないしは“内向性であることは実は人間関係にとってよいことなのです。内向性の人はすぐに人間関係をまとめることができるとの研究があります。いつも新しい関係を追い求めるのではなく，自分のもった関係を保つのが上手なのです。パーソナリティの解説を読みましょう”と言う。

misfortune controlでは“あなたの質問紙で気づいたことは，晩年の人生での事故のあいやすさと関係する尺度で得点が高いということです。パーソナリティの解説を読みましょう”と話すのである。

次いで実験者が読み上げる解説文の内容は次の通りである。future aloneでは“あなたは晩年の人生を一人ぼっちで終えるようなタイプです。今は友人や交際関係があるかもしれないが，20代中頃までには，その多くの人と疎遠となるでしょう。結婚もし，何回かするかもしれませんが，結婚生活は短く，30代までは続かない可能性が高い。交際関係も長続きせず，新たな交際関係をコンスタントに形成する年齢を過ぎると，だんだんと一人ぼっちになって終える見込みです。”

future belongingの場合は“あなたは人生を通して得ることの大きい交際関係をもてるタイプです。おそらくあなたは永く安定した結婚生活をおくり，後の人生まで続くような友人を得るでしょう。あなたはいつもあなたのことを気にかけてくれる友

人や人に恵まれる見込みです。”

misfortune controlでは“あなたはおそらく人生の後半では事故にあいやすいでしょう。腕や足を何回か折るかもしれませんし，車の事故でたぶん怪我をするでしょう。これまで事故にあう傾向がなかったとしても，人生の後半ではこのようなことが起こるでしょうし，多くの事故を経験するであろうとの見込みです。”

future belongingは社会的排斥の対照である社会的受容の条件であり，misfortune controlは，future aloneによる心理的行動的効果が社会的排斥によるものであって一般的なネガティブな出来事の予期によるものではないことを確認するため設けられるものである。また，上述のパーソナリティ解説文が読み上げられない統制条件としてno feed-back条件が付け加えられることもある。

排斥予見パラダイムの変形版には，DeWall, Twenge, Gitter, & Baumeister（2009, Exp.3）によるものがある。人間関係以外の面（キャリアにおける成功）では好ましい将来見込みがもてる場合でも，排斥の予期の効果がみられるのかを調べるための操作方法である。この変形版では，EPQは外向性とサージェンシイ（surgency）と呼ばれる特性が診断できると告げ，サージェンシイに関する*Psychological Today*誌に掲載されている論文（実験用に故意に作成されたもの）を読むように求める。論文中の文章は2種類作られており，社会的排斥条件にあたる人間関係-失敗（interpersonal-failure）条件の場合は“セントルイスのワシントン大学で行われた新しい研究は，サージェンシイがどのくらい高いか低いかを測ることで，その人の将来の個人的成功を予測できることを明らかにしている。例えば，サージェンシイの強さでその人が個人的な仕事で一般的にどのくらいよく達成できるかを知ることができる。サージェンシイの高得点者は多くの仕事を成し遂げたり，本を出したり，新発見をしたり，専門的な事柄に寄与したりすることが多い。しかし，他者との関係ではどのように機能するかはわからない。将来の人間関係の満足度や失敗を予測することはできない。サージェンシイ得点の高い人は個人的には成功する可能性が最も高いが，人間関係の充実度は経験するかもしれないし，そうでないかもしれない。”

個人的達成-失敗（individual-failure）条件では“セントルイスのワシントン大学で行われた新しい研究は，サージェンシイがどのくらい高いか低いかを測ることで，その人の将来の個人的失敗を予測できることを明らかにしている。例えば，サージェンシイの強さでその人が対人関係で一般的にどのくらいうまくゆくかを知ることができる。サージェンシイの高得点者は多くの友人を得たり，永続的な恋愛関係をもったりすることが多い。しかし，一人の個人としてはどのように作用するかはわからない。将来の専門的達成度を予測することはできない。サージェンシイ得点の高い人は人間関係の充実を経験する可能性が最も高いが，個人的に成功する存在になれるかどうかはわからない”と書かれてある。

いずれかの文章を読ませた後で，EPQの得点を正しく伝え，実験者は人間関係-失敗条件では，外向性得点は研究によると人間関係の面では好ましい事柄ではなく，人生における人間関係の困難さと結びついているが，サージェンシイは高いので専門職では成功を収めるであろうと教示する。個人的達成-失敗条件では，外向性得点は人間関係の面で好ましいもので，人間関係を継続して保つのが簡単にできることと関連している。サージェンシイ得点が高いので対人関係は首尾よく行くとの予想は立てられるが，専門的な仕事での達成はないであろうと教示するのである。なお，統制条件は外向性得点のみを告げられる群である。

排斥予見パラダムの長所は，実験研究における倫理的問題，実際的問題を比較的回避しやすいところにあるといえる。社会的排斥はその受け手にストレスの強い，不快状態をもたらすので，日常の社会生活の実際の関係において，たとえ一時的であっても排斥体験をひき起こすことは研究倫理の面から避けるべきであるし，そもそも実際に操作することも難しい。排斥予見パラダイムは将来

Table 1
排斥予見パラダイムの実験一覧

研究	参加者数（男性/女性）	平均年齢	操作への疑念表明	操作チェック	従属変数	偽のフィードバックの効果	感情尺度と条件間の感情の差	感情の媒介効果
Twenge et al. (2001)								
experiment 1	47(22/25)	18.9	0	なし	就活の妨害的評価	al<controls（小値ほど攻撃性大）		
experiment 2	16(8/8)	18.9	0	なし	同上(挑発のみとの比較)	al<neg.evaluation only		
experiment 3	38(22/16)	19.1	0	なし	同上(挑発なし・好意的評価の追加)	al-neg.evaluation< al-pos.evaluation, controls	single-item: al=misfo<belon	
Twenge et al. (2002)								
experiment 1	50(25/25)	18.5	3	なし	リスキーな富籤選択	al>belon, misfo	single-item: al<misfo, belon	
experiment 2	36(22/14)	19.0	2	なし	同上	al>belon, misfo	PANAS: ns	
experiment 3	31(13/18)	18.5	1	なし	健康志向項目の選択	al<belon, misfo		
experiment 4	39(23/16)	19.3	6	なし	先延ばし行為	al>belon, misfo	BMIS: ns	
Baumeister et al. (2002)								
experiment 1	40(19/21)	19.1	0	なし	知能検査問題正答	al<belon, misfo	single-item: al=misfo<belon	否認
experiment 2	65(41/24)	19.2	0	なし	GRE読解問題	al<belon, misfo(難文再生)	single-item: ns	
experiment 3	82(48/34)	18.7	0	なし	GRE分析推論問題 無意味綴り記銘	al<belon, misfo ns	PANAS: neg.: al>misfo>belon	否認
Twenge et al. (2003)								
experiment 3	43(23/20)	18.4	0	なし	説明文の使用文字数	al<belon, misfo	PANAS・状態自尊感情: ns	否認
experiment 5	30(10/20)	20.0	0	なし	潜在知覚の情動語選択	al<no feed		
experiment 6	40(26/14)	19.1	1	あり	鏡に面した席の選択	al<controls	BMIS・状態自尊感情: ns	否認
Baumeister et al. (2005)								
experiment 1	36(24/12)	18.7	1	なし	不味い飲料水の摂取	al<belon, misfo	single-item: ns	否認
experiment 3	45(19/26)	不明	0	あり	トレーシング課題時間	al<belon, misfo, no feeed	BMIS・状態自尊感情: ns	否認
experiment 4	30(6/24)	18.4	1	なし	両耳分離聴の正確さ	al<belon, misfo	BMIS: ns	否認
experiment 5	51(10/41)	19.0	1	なし	同上(金銭報酬条件)	cash: ns	BMIS: valence得点のみ有意	否認
experiment 6	55(13/37)	18.6	9	なし	同上(自覚条件)	mirror: ns	BMIS: ns	否認
DeWall & Baumeister (2006)								
experiment 1	33(9/24)	不明	0	なし	痛覚の閾値・耐性	al>belon, no feed	BMIS: ns	
experiment 2	30(6/24)	不明	0	なし	同上	al>belon, misfo	BMIS: ns	
experiment 3	30(11/19)	18.6	0	なし	同上 試合結果による至福感予想	al<belon, no feed 勝利: al<belon, nofeed 敗戦: al>belon, no feed	BMIS: ns	
experiment 4	31(10/20)	18.5	0	なし	痛覚の閾値・耐性 恋愛破談者への共感的関心	al<belon, no feed al<belon, no feed	BMIS: ns	
Maner et al. (2007)								
experiment 2	34(6/28)	不明	0	なし	共同作業の希望	al<belon, misfo	PANAS: ns	否認
Twenge et al. (2007)								
全体	259(126/133)	18.9						
experiment 1	34		0	なし	献金	al<belon, misfo, no feed	PANAS: positiveで有意 状態自尊感情: ns	否認
experiment 3	49		0	なし	落し物拾い援助	al<belon, misfo, no feed	BMIS・自尊感情: ns	否認
experiment 4	27		3	なし	ジレンマゲームの協力戦略	al<belon, misfo		
experiment 5	31		2	なし	同上(掛け金あり)	al<belon, no feed	PANAS: 不明	
experiment 6	68		0	あり	同上	al<belon		
experiment 7	30		0	なし	献金 恋愛破談者への共感的関心	al<belon, misfo al<belon, misfo		
DeWall et al. (2008)								
experiment 1	36(11/25)	不明	0	なし	目と手の協応ゲーム成績	社交性の診断 なし: al<belon, あり: al=belon	BMIS: ns	
experiment 2	40(8/32)	不明	0	なし	両耳分離聴	診断なし: al<belon, あり: al>belon	BMIS: ns	
experiment 4	145(42/103)	不明	0	なし	冷痛覚耐性	診断あり: belong<no feed	PANAS: ns	
experiment 5	47(16/31)	不明	0	なし	アナグラム	al: 診断あり>なし belon: あり<なし	BMIS: ns	
experiment 6	55(18/37)	不明	0	なし	同上(金銭報酬等の追加)	報酬なし: belong・診断あり<no feed診断なし	BMIS: ns	
experiment 7	153(34/119)	不明	0	なし	乗算(正答率)	診断あり: belon<al=misfo	BMIS: ns	

Table 1

（つづき）

研究	参加者数（男性/女性）	平均年齢	操作への疑念表明	操作チェック	従属変数	偽のフィードバックの効果	感情尺度と条件間の感情の差	感情の媒介効果
DeWall, Twenge et al. (2009)								
experiment 2	30(8/22)	不明	0	なし	就活の妨害的評価 敵意性評定	al<belon, no feed (小値ほど攻撃性大) al>belon=no feed	BMIS: ns	
experiment 3	50(18/32)	不明	0	あり	同上	対人-失敗<個人-失敗=no feed	BMIS: ns 状態敵意尺度: 対人-失敗>個人-失敗, no feed	
experiment 4	32(10/22)	不明	0	なし	白色ノイズの痛撃	対人-失敗>個人-失敗=no feed	状態敵意尺度: ns	
DeWall, Maner et al. (2009)								
experiment 1	69(8/61)	不明	0	なし	スマイル表情への注意	al<belon, misfo(潜時)	BMIS: ns	否認
experiment 2	44(14/29)	不明	0	なし	スマイル表情の凝視時間	al>belon, misfo	PANAS: ns	
experiment 3	85(24/61)	不明	0	なし	同上 快い風景写真	al<belon, misfo ns	PANAS: ns	

Note: al = future alone, belon = future belonging, misfo = misfortune control, no feed = no feedback, BMIS = Brief Mood Introspection Scale, PANAS = Positive and Negative Affect Schedule.

の社会的排斥の予期を扱うことで，実験状況のリアリティとアクチュアリティを確保し得る，また，デブリーフィングも実施しやすい実験手法であると評価できる。

排斥予見における社会的排斥の特徴

排斥予見パラダイムで扱われている社会的排斥現象の特徴は，第一に，実験参加者が今ある実際の，現実の関係において排斥を体験しているのではないことである。実験参加者が体験しているのは，将来の時点における排斥の予期，その可能性の予想である。その意味でこのパラダイムにおける社会的排斥の実体は，社会的排斥への脅威，怖れといえる。なお，このパラダイムではいつの時点の将来を問題としているかは曖昧である。future aloneの解説文の中の，20代半ばまでには友人の多くと疎遠になり，結婚生活も30代までは続かないと予言している箇所は，実験参加者（当然，20代前半までの者に限定される）にとっては数年先の近い将来の排斥の出来事であるが，一人ぼっちの晩年の人生を予言する箇所は50年前後先の，かなり遠い将来をさしているからである。どちらの時点の脅威がインパクトをもつのかは今後検討を要する問題である。

第二には，社会的排斥の原因が排斥される者の性格（外向性）であると示唆されていることである。社会的排斥を受けるさいの原因帰属は一般に曖昧な状況で行われることが多いが，排斥予見パラダイムでは内的，属性的，安定的な自己帰属を促進しているといえる。そのためこのパラダイムで扱われている排斥体験では，排斥を受けた者は無気力となり，既存の関係の直接的回復や新たな関係形成の意欲が弱まると思われる。

第三の特徴は，排斥の執行者が具体的ではなく特定できないことである。社会的排斥のタイプは，排斥の執行源に着目すると4タイプに分類できる。家族（配偶者）によるもの（幼児虐待など），同輩・同僚によるもの（いじめ，恋愛関係の破局など），組織体によるもの（突然の解雇など），世間によるもの（人種・病気による差別など）である。この中で排斥予見パラダイムが扱っている社会的排斥は，世間からの排斥に該当するといえよう。このケースの排斥により反社会的行為（攻撃行動）が生じると，そのターゲットは無差別的となる。

なお，社会的排斥を“拒絶-無視”に分類したMolden et al.（2009）は，排斥予見パラダイムの排斥現象は拒絶，無視のいずれとも同定できないとしている。

実験操作の妥当性

操作チェック

検討対象とした41実験の中で排斥予見パラダイムの偽のフィードバック操作の妥当性をチェック

しているものは，4実験である。Twenge, Catanese, & Baumeister（2003）が実験6において，従属変数の測定後に，実験参加者に対してEPQの自分の得点と自分が受けた診断内容の記憶検査を行い，また，診断内容は自分の将来がどのようなものであるかをどの程度描いているかについて7段階リカート尺度で回答させている。記憶検査の結果は全員正答であった。将来の描写程度には有意差があり，future belongingがfuture alone，misfortune controlよりも評定値が高く，後者の2条件間には差はなかった。同じ操作チェックはBaumeister et al.（2005）の実験3でも試みられている。自分の外向性得点，その高中低の群分けに関しては，future alone，future belongingとも全員が正答であり，misfortune controlでは正解者は91％であった。また診断内容が記述している将来の程度ではfuture aloneは他の統制条件よりも評定値が有意に低かった。これらの操作チェックの結果は，記憶検査結果はいずれのフィードバック内容に対しても同程度の注意が向けられていることを示唆しており操作の有効性の証拠といえるが，診断内容の将来記述程度の結果はフィードバック内容に対する信用度に条件差があることを示唆しており，操作の妥当性の面では望ましい結果とはいえない。

最も直接的な操作チェックは，Twenge, Baumeister, DeWall, Ciarocco, & Bartels（2007）の実験6で試みられている。この実験では偽のフィードバックを伝えた直後に，所属感（“私のことを気にかけてくれる人が大勢いる”，“今のところ，他者と非常に親しく結びついた感じがしている”，“今のところ，私は一人ぼっちだと感じている”の3項目），他者への信頼（“たいてい人は信頼できる”，“たいていの人は基本的に正直である”），統制感（“あなたの身に起こるたいていの事はあなた自身の決定の結果ですか，それともあなたがコントロールできないことの結果だと思いますか”，“私に生じたことは私自身がしたことである”），自覚状態（“今しがた，自分の内部の感情を意識していた”，“今しがた，自分の人生について内省していた”，“今しがた，自分の最も深い気持ちに気づいていた”）について，7段階リカート尺度で回答させた。その結果，所属感と他者信頼のみ条件差が有意であり，いずれもfuture alone（所属感：16.87）はfuture belonging（所属感：18.30）よりも弱かった。所属感における差異は操作の妥当性の有力な情報といえる。ただし，所属感の強さの得点可能範囲は3－21で，中位点は12であり，future aloneの所属感も中位点を越えていること，また実験6において所属感の差異は従属変数への媒介効果が認められなかったと報告されていることには留意する必要がある。

診断予見パラダイムの変形版の操作妥当性については，DeWall, Twenge et al.（2009）の実験3で報告されている。本実験とは別の65名の実験参加者に人間関係-失敗と個人的達成-失敗のいずれかのフィードバックを与えた後に，それによりどのくらい排斥されていると感じたか，受容されていると感じたか，職業的成功・失敗をどの程度予期させたかに回答させた。社会的排斥にあたる人間関係-失敗条件の方が排斥感は強く，受容感は弱かった（職業的成功・失敗の予期も条件通りの有意差が認められている）。

デブリーフィングにおいて，偽のフィードバック内容について疑念を表明した人数も，操作チェックの情報となり得る。疑念を表明した者がいたと報告されている実験は11実験であり，全実験数の26.8％にあたる。Table 1から明らかなように，1つの実験の中で最も人数の多かったケースは9名（参加者中の13.6％）であった。41実験の疑念表明者の合計は30名で，参加者全体（1997名）の1.5％である。排斥予見パラダイムにおいて操作に対して疑念を覚えた参加者は少ないといえる。なお，41実験全体の実験参加者の平均年齢のレンジは18.4－20.0である。この年代的特徴が，偽のフィードバックの信憑性を高めていると思われる。実験参加者の平均年齢を上げて追試することが必要となっている。

なお，性差については41実験中，なんらかの有意な効果が報告されているものは皆無である。

操作の収束妥当性

排斥予見の操作の妥当性を調べる他の方法は，排斥予見パラダイムとは異なる排斥操作方法を用いた実験との間で，得られた結果の同一性を調べる収束妥当性の検討である。異なる排斥操作方法を用いて得られた実験結果が排斥予見パラダイムの実験と同一方向のものであれば，そのことは排斥予見パラダイムの操作の妥当性を間接的に証明するといえる。

Baumeister, R. F.の研究グループがしばしば使用する他の排斥操作方法は，実験室の中での対面状況で実験参加者が他の仲間からその後の共同作業を拒絶されるというものである。この拒絶パラダイムには，実験の仲間集団から拒絶されるケースと，他の1名の実験仲間から拒絶されるケースとがある。仲間集団からの拒絶型では，実験参加者は4から6名の同性集団として集められ，先ず15分ほど一定の質問項目にそれぞれが答え合い面識を得た後に別室に別れ，お互いに好意と尊敬の念をもつ者同士で作業グループを作りたいとの口実の下で，最も一緒にやりたい人物を2名挙げるように求められる。実験者はその集計結果として，拒絶（rejected）条件では“誰からも選ばれなかった”と，受容（accepted）条件では“全員があなたを選んでいた”と口頭で告げるのである。

特定仲間からの拒絶型では，同性の1名のパートナーとの共同作業に入る前に，別室に別れビデオ撮りによる自己紹介のメッセージを交換し合うが，それを見たパートナーがその後の対面を拒否する。実験者は口頭で，拒絶条件では“なんだかわからないが，あなたのパートナーはあなたと会うことを望んでいない。うーむ。君たちは知り合いなの。そうだなぁ，気持ちよくないことをやるようにはいえないので，お互い同士会って行う課題はできない”と，統制（irrelevant-departure）条件では“なんだかわからないが，あなたのパートナーはあなたと会うことができないようだ。多分，忘れていたことがあって直ぐに帰らなければならないのだろう。うーむ。お互い会うことはできないようだ”と告げる。この特定仲間の拒絶型の変形には，記憶学習の助手を務めると紹介された女性（参加者を装った実験者助手）がその後の実験の仕事を放棄する手続もある。実験者が口頭で伝える拒否の理由は，特定仲間の場合とほぼ同一である。

仲間集団-拒絶実験と診断予見実験の従属変数における条件間差異の同一方向性については，Twenge et al.（2001, Exp.4 and 5）が攻撃行動で，Twenge et al.（2007, Exp.2）が順社会的行動で，Baumeister et al.（2005, Exp.2）が自己制御行為で，Twenge et al.（2003, Exp.4）が無気力反応で，Maner, DeWall, Baumeister, & Schller（2007, Exp.3）が親和性で立証している。特定仲間-拒絶実験と診断予見実験の結果の同一方向性に関しては，DeWall, Twenge et al.（2009, Exp.1a and 1b）が攻撃行動，DeWall, Baumeister, & Vohs（2008, Exp.3）が自己制御行為，DeWall, Maner, & Rouby（2009, Exp.4）がスマイル表情への注意の強さにおいて立証している。ただし，上記いずれの研究も完全に同一の従属変数を用いて追試したものではない。例えば，Twenge et al.（2001）の攻撃行動研究の従属変数は，診断予見では心理学科の研究員への就職を希望している人物についてのマイナス評価であり，仲間集団-拒絶ではゲームの敗者に加える白色ノイズの強度である。同一の従属変数を用いた追試実験で収束妥当性を検討することが有意義であろう。

排斥予見の効果の媒介要因

排斥予見の効果

人間関係における将来の孤独を予期させると（future alone），受容的関係を期待したり（future belonging），怪我による不吉な予期を抱いたり（misfortune control）するよりも，攻撃行動が促進され（DeWall, Twenge et al., 2009; Twenge et al., 2001），順社会的行動が衰退し（Twenge et al., 2007），自己制御行為が低下し（Baumeister et al., 2005; DeWall et al., 2008; Twenge, Catanese, &

Baumeister, 2002)，知的思考力が劣化し（Baumeister, Twenge, & Nuss, 2002)，注意や親和的行為の面で親和動機の影響が強まる（DeWall, Maner et al., 2009; Maner et al., 2007)，などの効果が既に証明されている。排斥の予期がひき起こすこれらの心理的，行動的効果の発生機制，換言すると，排斥予見の操作と従属変数の変化の関係を媒介している要因の探索は，重要な研究課題といえる。

感情・気分による媒介効果

Baumeister, R. F.の研究グループが一貫して，集中して検討している媒介要因は感情，気分である。感情・気分の測定で使われている尺度は，単一項目感情尺度（1：非常にネガティブ－7：非常にポジティブ)，Brief Mood Introspection Scale（BMIS: Mayer & Gaschke, 1988)，Positive and Negative Affect Schedule（PANAS: Watson, Clark, & Tellegen, 1988）である。BMISは現在の感情を覚醒（arousal: e.g., active）と方向（valence: e.g., happy）別に測定する質問紙である。PANASは現在のポジティブな感情（e.g., enthusiastic）とネガティブな感情（e.g., distress）を別個に測定する質問紙である。

ストレートな研究仮説は，future aloneはfuture belongingと異なりネガティブな感情が強く喚起され，その感情の違いが心理的行動的な差異に影響しているとするものであろう。しかし，Table 1の実験結果をみると，この仮説は支持されてはいない。そもそも診断予見パラダイムのフィードバック条件間には感情状態の違いが認められないとする実験結果が圧倒的に多い。上記いずれかの感情尺度を用いた33実験中，future aloneがfuture belongingよりもネガティブな感情が強かったとする実験例は6例に過ぎない。条件間の差異が比較的数多く認められている単一項目尺度の結果では，future aloneの値は尺度の中位値に近似したものであることが判明している（Twenge et al., 2001; Twenge et al., 2002)。

感情・気分の媒介効果の検討では，偏相関と共分散分析とが応用されている。排斥予見のフィードバック条件をダミー変数（future aloneとそれ以外）とし，従属変数との相関を感情を統制して算出しても有意な相関が得られ，感情と従属変数の相関がフィードバック条件を統制して算出すると無相関であれば，感情の媒介効果は否定される。例えば，Twenge et al.（2003）やBaumeister et al.（2005）はこの検定法で感情の媒介効果を否認している。また，DeWall, Maner et al.（2009）やManer et al.（2007）は，感情を共変量とする共分散分析を行い，感情を統制しても偽のフィードバックによる主効果が有意であることを明らかにすることで感情の媒介効果を否認している。

これらの実験結果は，排斥されると予期すると人はその後の適応のために自らの感情を遮断してしまう情動麻痺（emotional numbness）に陥ることを示唆している。Twenge et al.（2003, Exp.5）は単語の潜在知覚課題で，情動語を含む4つの単語の中から見えたと思うものを選択させると，情動語の選択数がfuture aloneはno feedbackよりも少ないことを見出している。このことは排斥の予期が感情を喚起させていない有力な証拠といえる。DeWall & Baumeister（2006, Exp.3）は身体的痛みの感覚低下がfuture aloneは他の統制条件より強く，この痛覚麻痺と情動麻痺とが関連していることを明らかにしている。

感情・気分の媒介効果を否認する実験結果の一貫性は高いが，この結論の説得力を高めるためには，BMIS，PANAS以外の尺度を用いて追試することや，質問紙バイアス（動揺している姿を他人に見せたくないとする自己呈示の影響）を避けるために，投影法的測定だけでなく生理学的測定法を応用してみることが有益であろう。なお，従来の実験手続では感情測定はフィードバック操作の直後に導入されるが，感情の自己知覚にはある程度の時間の経過が必要であるかもしれないので（Baumeister et al., 2005)，時間要因を加味した検討も望まれる。

共感的関心の媒介効果

future aloneは他の統制条件より，他者の苦しみ，心の痛みに対する共感的関心（empathic concern）が低く，そのことがその後の行動に影響を及ぼすことを例証した研究がある。Twenge et al.（2007, Exp.7）は，熱烈な恋愛関係が破局してそのショックから立ち直れないと告白する内容の，同性の他者の手書きエッセイを読ませ，sympathetic，warm，compassionate，soft-hearted，tenderの 5 項目について，どの程度感じたかを12段階尺度で回答させ，その得点を共感的関心の指標としている。その実験結果では，future aloneは他の統制条件よりも共感的関心の程度が低く，そのことがその後の順社会的行動（学生緊急基金への献金）に影響を及ぼしていることが判明した。DeWall & Baumeister（2006）は実験 4 で排斥予期と共感的関心の低下の関係を追認し，さらに自分の身体的痛覚の低下が共感的関心の低下と関連することを明らかにしている。

共感的関心の低下は情動麻痺の 1 つの形態とみなすことができる。またDeWall, Twenge et al.（2009）はfuture aloneが攻撃性を促進するのは，排斥予期が敵意的な認知的構え（hostile cognitive mindset）を喚起するためであることを例証しているが，この敵意的な認知的構えは共感的関心と表裏一体の関係にあると思われる。共感的関心，敵意的構えは自己コントロールの動機とも密接に関連しているはずなので，相互の関係について今後詳しく分析する必要があろう。なお，これまでの研究では共感的関心の対象人物は，実験場面においてその後のつき合い，関係が予期されない者であった。Maner et al.（2007）は，新たに友好的な関係を形成できる見込みのある人物に対しては排斥予期は親和動機を強めるとしているので，共感的関心の対象人物とのやりとりがある状況を設定して追試することも重要である。

その他の要因

排斥予期の効果の媒介要因としては他に，自尊感情が取上げられており，状態自尊感情尺度（State Self-Esteem Scale: Heatherton & Polivy, 1991），自尊感情尺度（Self-Esteem Scale: Rosenberg, 1965）が使われている。Table 1 から明らかなように，自尊感情に関してはフィードバック条件間の差，媒介効果とも認められていない。このことは情動麻痺と関連があるのかもしれない。

自覚状態（self-awareness）の低下については，Twenge et al.（2003, Exp.6）がfuture aloneは他の条件よりも，別室での待機のさいに鏡に面した席の選択を避けることが多いとしているが，Twenge et al.（2007, Exp.6）では質問紙による自覚状態の測定においてフィードバック条件間の差異は認められていない。後者の研究で使用された質問紙の妥当性，測定感度の問題の検討も含めて，自覚状態の媒介効果についての検討は十分には行われていない。

文化要因については未だ検討されていないが，Baumeister et al.（2002）がその可能性について言及している。即ち，排斥予見パラダイムでは，葛藤的，敵意的な敵対関係に将来陥ると予期させる統制条件を設けていない。それはアメリカ文化では人間関係の流動性が激しいために，そのような情報の信憑性を確保するのが難しいからである。しかし，相互依存的文化圏では事情は異なるであろう，としている。検討に値する提言といえよう。

引用文献

Baumeister, R. F., DeWall, C. N., Ciarocco, N. J., & Twenge, J. M. (2005). Social exclusion impairs self-regulation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **88**, 589-604.

Baumeister, R. F., & Leary, M. R. (1995). The need to belong: Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin*, **117**, 497-529.

Baumeister, R. F., Twenge, J. M., & Nuss, C. K. (2002). Effects of social exclusion on cognitive processes: Anticipated aloneness reduces

intelligent thought. *Journal of Personality and Social Psychology*, **83**, 817-827.

DeWall, C. N., & Baumeister, R. F. (2006). Alone but feeling no pain: Effects of social exclusion on physical pain tolerance and pain threshold, affective forecasting, and interpersonal empathy. *Journal of Personality and Social Psychology*, **91**, 1-15.

DeWall, C. N., Baumeister, R. F., & Vohs, K. D. (2008). Satiated with belongingness? Effects of acceptance, rejection, and task framing on self-regulatory performance. *Journal of Personality and Social Psychology*, **95**, 1367-1382.

DeWall, C. N., Maner, J. K., & Rouby, D. A. (2009). Social exclusion and early-stage interpersonal perception: Selective attention to signs of acceptance. *Journal of Personality and Social Psychology*, **96**, 729-741.

DeWall, C. N., Twenge, J. M., Gitter, S. A., & Baumeister, R. F. (2009). It's the thought that counts: The role of hostile cognition in shaping aggressive responses to social exclusion. *Journal of Personality and Social Psychology*, **96**, 45-59.

Eysenck, H. J., & Eysenck, S. B. G. (1975). *Manual of the Eysenck Personality Questionnaire.* San Diego, CA: EDITS.

Heatherton, T. F., & Polivy, J. (1991). Development and validation of a scale for measuring state self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, **60**, 895-910.

Knowles, M. L., & Gardner, W. L. (2007). Rejection. In R. F. Baumeister and K. D. Vohs (Eds.), *Encyclopedia of social psychology*, Vol.2. Los Angeles, CA: SAGE Publications.

Maner, J. K., DeWall, C. N., Baumeiter, R. F., & Schller, M. (2007). Does social exclusion motivate interpersonal reconnection? Resolving the "porcupine problem" *Journal of Personality and Social Psychology*, **92**, 42-55.

Mayer, J. D., & Gaschke, Y. N. (1988). The experience and meta-experience of mood. *Journal of Personality and Social Psychology*, **55**, 102-111.

Molden, D. C., Lucas, G. M., Gardner, W. L., Dean, K., & Knowles, M. L. (2009). Motivation for prevention or promotion following social exclusion: Being rejected versus being ignored. *Journal of Personality and Social Psychology*, **96**, 415-431.

Rosenberg, M. (1965). *Society and adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.

Schachter, S. (1951). Deviation, rejection, and communication. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **46**, 190-207.

Twenge, J. M., Baumeister, R. F., DeWall, C. N., Ciarocco, N. J., & Bartels, J. M. (2007). Social exclusion decreases prosocial behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **92**, 56-66.

Twenge, J. M., Baumeister, R. F., Tice, D. M., & Stucke, T. S. (2001). If you can't join them, beat them: Effects of social exclusion on aggressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **81**, 1058-1069.

Twenge, J. M., Catanese, K. R., & Baumeister, R. F. (2002). Social exclusion causes self-defeating behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **83**, 606-615.

Twenge, J. M., Catanese, K. R., & Baumeister, R. F. (2003). Social exclusion and the deconstructed state: Time perception, meaninglessness, lethargy, lack of emotion, and self-awareness. *Journal of Personality and Social Psychology*, **85**, 409-423.

Watson, D., Clark, L. A., & Tellegen, A. (1988). Development and validation of brief measures of positive and negative affect: The PANAS scales. *Journal of Personality and Social Psychology*, **54,** 1063-1070.

Williams, K. D., & Carter-Sowell, A. D. (2007). Ostracism. In R. F. Baumeister and K. D.

Vohs (Eds.), *Encyclopedia of social psychology*, Vol.2. Los Angeles, CA: SAGE Publications.

Williams, K. D., Wesselmann, E. D., & Chen, Z. (2007). Social exclusion. In R. F. Baumeister and K. D. Vohs (Eds.), *Encyclopedia of social psychology*, Vol.2. Los Angeles, CA: SAGE Publications.

—— 2009.9.14 受稿，2009.11.24 受理 ——